

~~~~~  
研究ノート  
~~~~~

暗闇の中の彷徨——『マクベス』 雑感

狩 野 良 規*

『マクベス』は、若いころからもう何回読み直したかわからない、僕のいちばんの愛読書である。だが、あの有名なマクベスのモノローグ——

明日、明日、また明日と、
小刻みな忍び足で一日一日が過ぎてゆき、
とうとう定められた最後の時にたどりつく。
昨日という日々はいつも愚か者たちに、埃まみれの
死への道を照らしてきた。消えろ、消えろ、
つかの間のともし火！ 人生は歩きまわる影法師、
下手くそな役者だ、舞台の上で大仰に出番を演じ、
退場すれば誰も覚えていない。それは白痴の語る
一場の物語、わめき散らす声と怒りが響きわたり、
しかし意味は何もない¹⁾。

* 青山学院大学国際政治経済学部教授

1) To-morrow, and to-morrow, and to-morrow,
Creeps in this petty pace from day to day,
To the last syllable of recorded time;
And all our yesterdays have lighted fools
The way to dusty death. Out, out, brief candle!
Life's but a walking shadow, a poor player
That struts and frets his hour upon the stage
And then is heard no more: it is a tale
Told by an idiot, full of sound and fury,
Signifying nothing. (*Macbeth*, V.v.19–28)

は、思うに必ずしも実感を込めて理解していなかった。ふだんから僕が英語の鼻歌のように誦^{そら}んじている 10 行なのに。

もう終幕が見えてきた 5 幕 5 場、マクベスが夫人死去の報に接した直後の独白である。虚無的な響き、いや学生のころは“アンニユイ”とフランス語を使ってみたくなるような、心地よい倦怠感を誘う一節。なんでもこの 10 行から、15 人以上の現代作家が作品のタイトルを頂戴しているとか²⁾。アメリカのノーベル文学賞作家、ウィリアム・フォークナーの『響きと怒り (*The Sound and the Fury*)』(1929 年)、おゝ、これもそうだ。へえ、やっぱり有名なんだ——と、その程度の代物だった。ところが、最近はいやに切々と、じんわりと伝わってくるものがある。嫌だなあ、年とったなあ。もっとも、嫁さんはお陰様で、まだぴんぴんしているけれど。

さて、1603 年にエリザベス女王が崩御し、イングランドはスコットランドのステュアート家から王様を迎えた³⁾。女王に劣らず芝居好きな新国王ジェームズ一世は、シェイクスピアが幹部をしていた宮内大臣一座のパトロンとなり、劇団はめでたく国王一座となる。また、ジェームズは悪魔学をご研究遊ばしていたという。

そこで、シェイクスピアはそつなく、11 世紀のスコットランドを舞台にした『マクベス』(1605-6 年)を書いた。開幕は、魔女 3 人が荒野でマクベスを待ち伏せ、呪文をかけようと語り合う場面である。

2) 富原芳彰『シェイクスピア入門』研究社、1955 年、pp. 2-5。

3) “処女王”エリザベス一世には、子供も、それから兄弟姉妹もいなかった。そこで、彼女の祖父ヘンリー七世の娘でスコットランドのステュアート家に嫁いでいたマーガレットの曾孫、つまりは遠縁のそのまた遠縁にあたるスコットランド国王ジェームズ六世が次の君主に選ばれ、イングランド国王としてはジェームズ一世と称して即位した。まだイングランドとスコットランドが別々の独立国だった時代。よって、同じ国王が 2 つの国の君主を兼ねる「同君連合」なる形態をとった。ちなみに、スコットランドがイングランドに乗っ取られるのは 1707 年だから、両国の合併は 100 年以上先の話。また、ジェームズの母親はエリザベス一世の天敵で、彼女に処刑されたメリー・ステュアートだから、国家権力の移譲はなんとも不可解で非情な政治的判断にゆだねられていたと言わざるを得ない。

おどろおどろしく、「きれいは汚い、汚いはきれい (Fair is foul, and foul is fair.)」と唱える。これ、実は『マクベス』のライトモチーフである。世の中すべからく「水清ければ、魚棲まず」。また、「清濁併せ呑む」難しさよ。さらに太宰治なら、「恋とは」「美しき事を夢みて、^{きたな}穢^{わざ}き業をするものぞ」(「東京八景」)——ちょっと意味が違うか?!

ほどなく1幕3場、マクベス初登場の場で、彼の第一声は、「こんなに天気が変わる日 (So foul and fair a day) は初めてだ」。あれま、もう魔女の呪文にかかっている。内乱を鎮圧して帰路についた勇将に魔女は、「万歳、マクベス! おまえはやがて国王になると。一緒にいた彼の同僚バンクォーが、俺の未来も占ってみろと言うと、「おまえは王にはなれないが、おまえの子孫はなるだろう」と。危ないよ〜、こういう怪しげなつぶやきは。

激戦を制したマクベスに対する国王ダンカンの信頼は一気に上がった。今宵はマクベスの居城で戦勝を祝おうと^{のたま}宣う。一方、城では夫人がマクベスからきた手紙で事のしだいを知り、あの人は野心があるのに気性が乳のように優しい、偉大なる地位を欲しているのに手を汚すことはしたくない、とぼやいている。

イギリス文学史上に名高い悪妻である。およそ女優たる者、楚々とした善良なる淑女よりも、こういうどす黒い邪心を抱いた悪女を演じてみたいものだ。猛女そのままに亭主の尻をビシビシ叩くもよし、官能的に、肉感的に、腰の引けた宿六を教唆するもよし。

いや、出世するには、悪妻を持つにかぎるという説もある。かのソクラテスも、妻クサンチッペに罵倒されるわ、水をぶっかけられるわ、それゆえに偉大なる哲学者になれた?!⁴⁾ でも、嫁さんの顔を見たくなくて学問に逃げ込むならまだしも、王位を篡奪しろとけしかけられるのでは。あなた、ダンカンがわ

4) 僕は25歳で学生結婚した折、金がないので披露宴の席次表は会場に依頼せず、手書きで作ってコピーした。出席者の名前の上に落書きを添えて。僕のところには、「痩せたソクラテスになりたい」と書いた。東大総長の大河内一男は、J. S. ミルを引用して、「太った豚になるよりも痩せたソクラテスたれ」と卒業式で告辞した。だが、僕の当時の悩みはダイエットがうまくいかないこと。また、嫁さんは「ソクラテスの妻になるまい」と決意表明を綴った。けれども、誰もわかってくれない。そのころの若い二人は、教養ある友人には恵まれていなかった?!

が家に来るのよ、千載一遇のチャンスじゃないの、殺^やっちゃいなさいよ！おゝ、
こわ怖！⁵⁾

城の前で夫人が国王を迎える1幕6場は、短くも明るい場面。ダンカンは、清々しい風が心地よい、と。陰謀渦巻く暗黒の悲劇で、一瞬、空気を入れ替える。みごとな緩急。

2幕に入っても、マクベスはまだウジウジしている。兵士たちが祝い酒に酔って寝静まった真夜中、彼は短剣の幻を見て、動揺する。だいぶ参っている。だが、ようやく決心し、ダンカンの寝ている部屋へ。舞台では、暗闇の中、退場したかと思うと、すぐに戻ってくる。「俺はやったぞ。」えっ、もう殺っちゃったの。ハリウッドのアクション映画にあらず。見せる芝居ではない。ギリシャ悲劇同様、切った張ったは舞台の外で行なわれることが多い。これ、セリフ劇の王道といえようか。

悪に手を染めた男が嘆く、「マクベスは眠りを殺した」、「海神ネプチューンの支配する大海原の水を全部使っても、俺の手についたこの血を洗い流せるだろうか」。名ゼリフが続く。一方夫人は、亭主がダンカンに刺した短剣を手に見て、なんでそんなもの持ってきたの、と。自ら血まみれの剣を死体の転がる部屋に置きに行く。付き人に罪をなすりつけなくては。悪妻の方が気丈夫である。

すると、ドンドンドンッ、誰か来た、城の門を叩く音が鳴り響く。国王が暗殺されるという極悪非道な、漆黒の闇の世界が、一気に崩れる。観客が日常感覚を取り戻す。絶品の効果音である^{6), 7)}。さらに道化役の泥酔した門番が、

5) えっ、僕ですか、悪妻をもってまで出世したくない、“ただの教授”で十分背伸びしました、成り上がりました。もうけっこうです。

6) ロマン派の批評家トマス・ディ・クインシーの「『マクベス』の門を叩くことについて」(1823年)の分析が有名。翻訳は、川地美子(編訳)『古典的シェイクスピア論叢——ベン・ジョンソンからカーライルまで』(みすず書房、1994年)に入っている。昔の批評家のシェイクスピア論を読んでみるのも、一興。

7) もうひとつ注を。僕が世界最高の『マクベス』映画と高く評価している黒澤明『蜘蛛巣城』(1957年、日本映画)では、鷲津武時(マクベス)が殿を殺しに行くシークエンスを、お能の演技を応用した6分20秒の“黙劇”にしている。そして、浅茅(マクベス夫人)の「狼藉者じゃあ」の一声でスクリーンに音が戻り、城内が一斉に我

誰だ、うるせえ、としゃべりまくって、客席をなごませる。「コミック・リリーフ⁸⁾」のお手本のような場面である。

そして、城内はむろん一騒ぎ、マクベスは自ら殺した部屋付きの兵士にダンカン暗殺の罪を着せるが、次の2幕4場では、すでに貴族のマクダフとロスが、あれはマクベスの仕業だな、と噂話をしている⁹⁾。だが、人はいつの時代もどこの国でも、新権力にそんなに軽々に逆らわないものである。新王の実力のほどがわかるまでは、皆知って知らん振り。マクベスは首尾よく王位を手に入れる。

が、それにしても、この芝居、クライマックスがあまりにも早い。マクベスが一気に王座に駆け登り、さてこれから先、何を描こうというのか。『マクベス』は、シェイクスピアが20代後半に書いた『リチャード三世』を、10数年後に改作した作品といえる。若書きの歴史劇は、独裁者の暗黒政治の話なのに、どこか陽気で、明るくて、軽やかだった。つまりは鼻つまみ者の醜男^{ぶおとこ}リチャードが己の野望に目をきらつかせ、やりたい放題に暴れまくる悪党一代記。日本ならさしずめ、勝新太郎の座頭市か井上ひさしの描く藪原検校の雰囲気^{やぶはらけんぎょう}だろうか(例が古くてごめん)。

に返る。黒澤が日本の戦国時代に舞台を移して撮ったシェイクスピア映画は、各所で「原作の本質」を映像的にパラフレーズして秀逸である。拙著『シェイクスピア・オン・スクリーン』三修社、1996年、第8章第2節「能の演技——黒澤明の『蜘蛛巣城』」をご参照あれ。

- 8) 悲劇なるもの、ピーンと張り詰めた雰囲気がずっと漂っている舞台が格好いいと考えがちだが、残念ながら人間の集中力はそう長くは続かない。そこで、よくできた芝居では、緊張する場面の前後にコミカルな一場が上手に挿入されている。これを「コミック・リリーフ (comic relief)」という。いや、無理に笑わせる必要はない、観客がほっと息を抜ける、ふっと安堵^{やすと}できる一瞬を作れば、それで見ている者はふたたびシリアスな物語に集中する態勢に戻る。
- 9) ヤン・コットの影響を受けたロマン・ポランスキー監督の『マクベス』(1971年、イギリス映画)は、原作では端役に過ぎない貴族ロスを不気味な日和見主義者として膨らませ、体制が変わるたびに人々の生活が一変した戦後の東欧社会の政治状況とオーバーラップさせていた。これも拙著『シェイクスピア・オン・スクリーン』の第8章をご一読のほど。もっとも、共産主義社会だけでなく、現代の日本でも、首相だろうが社長だろうが、およそトップの交代劇は、なにかきな臭いものがあるなと感じていても、とりあえずは新たなリーダーがどう動くのか、力量はいかほどかと見定めるのが、“大人の常識”! 違うか?

悪のヒーローがなぜ受けるのか。それは自身が心の奥底に隠しもっている欲望を、世の法律や道徳などものは、極限まで思う存分追求してみたいという、人間誰しもが密かに抱いている願望を体現しているから。そんな悪の華の典型、リチャード三世の「野望の果て」を綴った顛末記は、見る者に解放感さえ覚えさせる痛快な人気芝居だった。

けれども、40歳を過ぎたシェイクスピアがふたたび創作した王位篡奪者は、グズグズと思い悩む。それは魔女と嫁さんに眠っていた野心を煽られ、躊躇すれば怖い顔でにらまれ、結局勢いに乗じて王権を強奪した前半よりも、むしろ王座に就いてからの方が顕著になる。すなわち、マクベスが「空しき王冠 (hollow crown)¹⁰⁾」を手に入れてからの不安と憂鬱が肝の心理劇。だから後半は長くて、しかし元気のない、意気の上がらない、そう、まじめな男の焦燥と苦悶の物語となる。なるほど、ハリウッドのアクションスターとは異なる質の演技力とセリフ術が要求される、実に沙翁らしい内面劇。

魔女はバンクォーの子孫が国王になると予言した。まずい、バンクォーと、それからあいつの小子も始末しろ。刺客は命令どおりにバンクォーを暗殺するが、彼の息子は取り逃がす。それを聞いたマクベスの動揺はいや増し、貴族たちの集まった宴席でバンクォーの亡霊に慄くという醜態をさらす。

『マクベス』を読んでいたクラスの院生が言った、「国王になれると预言されたんだから、待っていればいいのに」と。また、もうひとりの院生は、「マクベスは明智光秀。最後まで待てる家康が勝った」。学生の自由な読みはいつも楽しいが、しかし二人の解釈は残念ながら、日本の戦国時代の終焉を回顧しただけ。スコットランドでは、バンクォーは待つ間もなく殺害された。さらにマクダフも、留守宅を襲われ、妻子を惨殺される。

そう、優れたリーダーは自分の足りない部分を補ってくれる有能な部下をブレインに迎える。けれども独裁者は、自分に取って代わりそうな実力のある臣

10) シェイクスピアの『リチャード二世』, III.ii.160. シェイクスピアは自国の歴史を綴っているうちに、神から授かった地位に鎮座しているはずの国王の、その心が鎮まることなきを実感したのであろう。

下を排除しようとする。だから、「待つ」という策には、よほどの手練手管と胆力が必要だと知るべし。

と、そうこうしているうちに、5幕1場。マクベス夫人がひさしぶりに舞台上に登場すると、精神を侵されてさかんに手を洗う仕草をしている。まだ血の臭いがすると、つぶやきながら。あれほど勝ち気な嫁さんだったのに。悪妻の方が先に心が折れた！夫人にはほとんどその心理を説明するセリフがない。あっても素朴な、乾いた散文がちよぽとだけ。いつもの沙翁のねちっこい、修辭的な、重厚な、言い方を変えれば冗長な、でも我慢して聞いているとズシンと胸に響く詩行は語らせてもらえない。あゝ、舌足らず。ほぼアクションのみで、しかしある意味、女優の腕の見せどころともいえようか。

奥方が乱心するまでの間に、亭主の方は魔女に会いに行く。バーナムの森が動くまでは大丈夫だ、女の腹から生まれた者には、おまえは滅ばせない。ヘッヘッヘッ、またまた怪しげな予言。だけど人間、逆風になると、こんなまやかしの占いにもすがりたくなる。

木下順二はマクベスの心理を、運転手が死んだ車が急坂を逆落としにころがり落ちていく、それを車中から眺めている人間の心境だ、と述べている。落ちていく、落ちていく、周囲の風景が、木々の一本一本までが、さらには転落する自分自身も鮮やかに見える状況、と¹¹⁾。なるほど。

恥ずかしながら我が身を振り返れば、僕は人を押しのけてもトップに立ちたいという欲求も器量も持ち合わせず、それでも職場で人並みの仕事をすれば、そりゃ脛^{すね}の一つや二つ、三つや四つくらいの傷はあるわけで……ある時管理室のおばちゃんに、「狩野さん、あんたここまで来るまでに、いったい何人の人を踏み台にしたの？」と問われ、「そうねえ、片手で数えられるくらいかな。でも、僕を踏み台にした奴は二桁はいるぜ」と。

また、昔、役者の真似事をしたこともあるが、観客席から見ればきれいな舞台も、自分がそこに立てば、とっちらかった舞台裏まですべて丸見え。もう一

11) 木下順二『シェイクスピアの世界』岩波書店、1973年、p. 203。

度、真っ白な目で、素直に、純真な気持ちで客席から芝居を見たいと思っても、
ついつい気になるのは舞台の裏側の方。「きれいは汚い、汚いはきれい。」芝居
は虚業だ！そして人生もまた、虚業なのかもしれない。

マクベスに、お妃が他界したとの報が伝わる。「明日、明日、また明日……」
織田信長謡う「人生 50 年」の時代の、沙翁 40 代の感慨である。平均寿命が延
びた今日の日本なら、さしずめ還暦前くらいか。おゝ、今の僕の年齢ね。

だが、その後マクベスはもう一戦、ダンカンの息子マルカムやマクダフらの
軍勢との絶望的な戦いに臨む。やれやれ、僕も定年まで、もう一丁かな。疲れ
るな。

シェイクスピアが自らの精神的危機におちいった時期に書いた作品であろう。
世の中と折り合いがつかず、人生と和解できず、先の希望を抱けない。しかし、
そんな深い暗闇の中を彷徨する五里霧中の人間心理を描いて、『マクベス』は人
生の折り返し点を過ぎ、下り坂を歩む人々に、大仰で下手くそな生き様もまた
善しと深呼吸させてくれる、凜^{りん}とした悲劇の傑作である。（2015 年 1 月脱稿）